

# SRID NEWSLETTER

No. 395 November 国際開発研究者協会 創設者 大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www.sridonline.net>

ツーステップ技術移転のススメ  
【アフリカの平和】

豊間根則道  
甲斐 信好

---

## お知らせ

◆ 11月幹事会

○日時 11月20日(木) 午後6時30分から8時30分

○会場: UNIDO 東京投資技術移転促進事務所

102-0092 東京都千代田区隼町2-19 ジョワレ半蔵門7階

t e l : 0 3 - 6 8 2 6 - 7 0 1 0

f a x : 0 3 - 3 2 8 8 - 3 3 0 0

地下鉄半蔵門線 半蔵門駅1番出口から徒歩1分

<http://www.unido.or.jp/jpn1.html>

駐車場ご案内:近くにホテル「グランドアーク半蔵門」があり、  
こちらの駐車場をご利用頂けます。

◆ 12月3日(水) 本会・学生部共同懇談会

○日時: 2008年12月3日(水) 18:00 - 20:00頃

○講師: 近藤明菜氏 (元 SRID 学生部会員)

○テーマ: 日本の移民政策について

○会場: 国連大学 学長会議室 12階

\*事前申込要 申込先: 青柳幹事 <[Aoyagi.Keitaro@jica.go.jp](mailto:Aoyagi.Keitaro@jica.go.jp)>

◆ ニュースレターNo. 396

西ヶ谷氏 小林氏

---

ツーステップ技術移転のススメ

(財) 国際開発センター  
豊間根則道

今年8月に一つのJICAプロジェクトが丸9年の歴史を閉じた。「インドネシア国地方教育行政改善計画プロジェクト」で、通称REDIPと呼ばれている。中学校と郡を対象にしてブロック・グラントを配り、学校や郡がやりたい活動を自由にやってもらったものである。

3フェーズに及んだこのプロジェクトは、最後は1市4県の68郡、581校を対象として終わったが、そのうちの1市2県については市・県内の全郡全中学校をカバーし、しかもそのブロック・グラント予算は全額市・県の予算から支出されるという「完全自立」を果たした。フェーズ3から新たに加わった残り2県についても着々と同じ自立化への道を歩んでいるところである。さらには、国家教育省自身がこのモデルを採用し、省予算を使って実施しているところが3県(23郡、303校)ある。REDIPモデルと呼ばれるこのプロジェクトのやり方はインドネシア政府に受け入れられ、全国各地で根を下ろしつつある。

このプロジェクトが成功したのにはいくつか理由があるが、その一つは地元の人材を使って手厚い技術支援を施したことであると思っている。

ブロック・グラントを受ける前に学校と郡(正確には郡レベルに新しく作った「郡教育開発チーム」という組織)はやりたい活動を自分で考え、そのコストを計算し、プロポーザルを書かなくてはいけない。活動を終えたあとには活動報告書と会計報告書を作って提出することが求められる。これらの一連の仕事は、慣れた人にはどうということのないものだが、学校や郡の関係者のほとんどはそのようなことをした経験がなく、決められた簡単なフォームを正しく埋めるのにさえ難渋する有り様だった。

そのような人を助けたのは我々が雇用したローカル・コンサルタントの人達である。彼らは一番多かった時期には22名に及ぶが、対象となった学校と郡教育開発チームを分担してすべてくまなくカバーし、頻繁に訪問して必要な助言や指導を丁寧に行なった。その助言はありとあらゆるテーマに及ぶ。彼らにとっても初めてのこの経験を通じて彼ら自身が非常に多くのことを学校現場から学び、理解していったのである。その経験から最後は市・県教育局のアドバイザー的な役目までも果たすようになり、言葉の真の意味でREDIPのファシリテーターになった。彼らなしにこのプロジェクトのここまでの成功はあり得なかったと私は確信している。

ところが、REDIP の第 3 フェーズの中間評価があった時、評価調査団から次の指摘を受けて私は愕然とした。

「JICA の技術移転の対象はカウンターパートであってローカル・コンサルタントではない。ローカル・コンサルタントがいかに力をつけてもそれはプロジェクトの目的外だ。」

これは余りにも拘子定規な、狭い見方だと私は思う。確かにほとんどの JICA プロジェクト、特に技術協力プロジェクトは、特定のカウンターパートを相手に彼らと協働しながら技術移転を果たすことが目的になっている。それはいい。しかし、プロジェクトの実施の中で関わってくるその国の他の人々、とりわけローカル・コンサルタントやローカル・スタッフも、JICA プロジェクトに参画することを通じて大なり小なり何かを学んでいて、それもまたその国全体に対しての技術移転の一つと見ることはできるはずだ。それを切り捨ててしまうのは JICA プロジェクトの意味や効果の自己否定であると思う。

さらに、実は、カウンターパートに我々が直接伝えるよりもローカル・コンサルタントのような別の人を介して伝える方が効果的なこともあるということを知った。それは言葉の問題があるからである。カウンターパートは必ずしも皆英語ができるわけではない。我々コンサルタントも全員が現地語に堪能であることはない。とすれば、まず英語で自由にコミュニケーションできる地元のローカル・コンサルタントに理解してもらい、次に彼らを通じてカウンターパートに伝えてもらう方が効率よく、しかも間違いがない。通訳とは違う。プロジェクトのエッセンスを理解した上で、それを現地語でカウンターパートに分かり易く伝える人、それがローカル・コンサルタントの果たしたもう一つの大事な役目だったのである。

後から振り返ると REDIP ではこの役目が非常に重要だった。中心となるカウンターパートが市・県教育局だったから、英語のできる人はほぼ皆無。また、このような現場指向型のプロジェクトを動かしたこともなく、カウンターパートもまた技術支援を大いに必要としていたのである。それをやったのは我々日本人専門家ではなく、このローカル・コンサルタントの人達だった。我々が直にやってもうまく行かなかっただろうことは明白である。

「ツーステップ・ローン」に倣って、私はこれを「ツーステップ技術移転」と呼びたい。JICA 専門家がカウンターパートに直に伝えることだけが技術移転

のやり方ではない。ローカル・コンサルタントを介して行なう技術移転も立派に存在し、場合によってはその方が適切なこともあるのである。インドネシアのREDIPはそのことを教え、証明したと私は思っている。「ツーステップ技術移転」もまた大いに試みるべきである。

---

## 【アフリカの平和】

甲斐信好

学生を連れてアフリカを訪問するようになって今年で4年目となる。東アジアが専門の私がアフリカに行くようになったのは、知人のジャーナリスト・大津司郎氏の、「アフリカを知らずして現代の国際政治を語ることはできないでしょう」という言葉に動かされたからだ。専門家の集団であるSRIDで述べるのも恥ずかしい限りだが、アフリカでは見るもの聞くこと衝撃ばかりで、まさしく目からウロコの連続であった。なかでも昨年・今年と続けて訪れた中央アフリカのルワンダは、国際政治とは何かと考えさせる格好の舞台であった。

ルワンダは国土が2万6千平方メートル余り、ほぼ四国と同じ広さである。アフリカのスイスと呼ばれ、大部分は1300メートルを越える高原地帯からなる。「千の丘（ミル・コリン）の国」と呼ばれる美しい丘陵が連なる国でもある。

その美しい国で、1994年4月から6月までの間、約780万人（推定）の国民のうち少なくとも80万人が殺された。虐殺は一般に、多数派を占めるフツ族の、長年支配層にあったツチ族に対する怨念が原因だとされている。しかしそのような単純なレベルではなく、虐殺はエスニックの格差と対立を利用した政治的なものであった。

国内に武器を行き渡らせた周到な準備、ラジオや新聞を使って繰り返し行われたプロパガンダ、いかに効率よく殺すか訓練された民兵（ミリシア）の存在など、政治や教育の果たした「闇の部分」が見える。国際社会も、また虐殺を知らながら意図的に無視した。

フツとツチは、実際には相互の婚姻も進んでおり、ツチが一般に身長が高いことをのぞけば、少なくとも外部者の目から区別することは難しい。

このツチとフツの関係を支配の道具としたのがドイツ、ベルギーによる植民地支配であった。19世紀末からドイツによる入植が開始され、ルワンダは1908年から24年までドイツ、1924年から62年までベルギーによる植民地支配を受けた。この植民地支配の間に、ツチとフツの差は明確となった。

ツチとフツの格差を決定的にしたのがIDカード（身分証明書）の導入であ

った。キガリの虐殺記念館で見ることができるIDカードには、所持者がそれぞれツチ、フツ、または少数民族のトゥワであるかが明確に記入されている。その上でベルギーは間接支配の当事者としてツチを扱ったのである。当時の公務員の95パーセント以上がツチであった。

1933年（一説には1931年）から発行されるようになったこのIDカードが、皮肉にも60年後の虐殺時に、殺す者と殺される者を区別する証となった。逆を言えばIDカード無しでは、ツチとフツの区別をつけることが難しかったことをも物語っている。

成田からのべ33時間かけて到着したルワンダの首都キガリの空港では、預けた荷物すべてがロスバゲで出てこない。ついでながら帰りは、折り返しの飛行機が着陸時に翼を傷つけて、11時間キガリ空港に閉じ込められた。「アフリカとは待つことである」という名言をイヤというほど実感する。

今回のルワンダ滞在中、首都キガリから約160キロ離れたキブ KIVU 湖岸の町ギセニ GISENYI まで小旅行をした。ギセニは暗殺されたハビヤリマナ大統領の、夫人の出身地で、臨時に首都がおかれたこともある。キブ湖の対岸にはコンゴ民主共和国が望める。そして国境を越えれば今でも紛争が続いている。10月以降、戦闘が激しくなったとの報告がある。本当はコンゴ民主共和国に入りゴマの難民キャンプを訪れたかったが、外務省の退避勧告が出ている地域でもあり、今回は見送ることとした。

ギセニに近づくにつれ、PKOのインド兵を乗せた国連の車両や、コンゴ民主共和国から戻ってきたフツ族難民のキャンプ、埃まみれの囚人シャツで作業をしているルワンダ虐殺の加害者たちを見ることができた。学生たちの顔にも緊張が高まる。

コンゴ民主共和国との国境まで行ってみた。予想に反して、明るくて、おもちゃのようにちゃちで「えっ、これが国境？」と拍子抜けするくらいだ。

キブ湖はルワンダを植民地にした欧米人が開いたリゾートでもある。私たちも湖でボートに乗って、無人島に上陸したり、温泉が出ている場所を訪れたりした。リゾート気分には浸っていると、国境の数十キロ先で、今も殺しあっていることが非現実的に思われてくる。そのコントラストに戸惑う。

湖畔で昼食を取ったレストランを出たすぐのところに記念碑があった。1998年、フツ族の残党が、地元のビール工場の従業員バスを襲い、120名余りを殺害した鎮魂碑である。その事実を目の前に見たとき、ちょっとリゾート気分だったバスの中が一瞬凍りついた。つい10年前だ。殺し合いはここでも続いている。

今回のツアーでは、一見平和が戻ってきたルワンダの日常に、さまざまな思いが渦巻いていることを実感した。実は虐殺は場所を変えただけで、まだ終わっていない。「アフリカの平和は、戦争と戦争の間に過ぎない」。その残酷な現実を実感している。